

## 様式 4

令和元年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立宮田小学校 養護教諭 渡邊 真理子

- 1 派遣期日 令和元年 8 月 16 日（金）
- 2 研修先 会場名 日本教育会館一ツ橋ホール 8 階 第一会議室  
所在地 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2  
<http://www.jec.or.jp/>

### 3 研修内容 1

#### 研究主題

いじめから見る学校、教育、社会の問題

講師 萩上 チキさん（ストップいじめ！ナビ代表理事）

いじめに関する悲惨なニュースは連日のように報じられ、そのたびに多くの議論が交わされているが、具体的な根拠にかけものも少なくない現状である。いじめが社会問題化して以来 30 年以上に渡り、日本でも世界でも数々の研究が行われ多くの社会理論が磨かれてきた。そうした数多くの研究データをもとに本当に有効ないじめ対策とは何かを議論する。

#### （1）データで読み解くいじめの傾向

##### ① いじめのホットスポット

教室 74.9%、廊下や階段 29.7%、クラブ活動 16.2、校庭 12.3%他といういじめの起きやすい場所というデータが出ている。このことから教室でのいじめを減らすことが、一番のターゲットとなることがわかる。教室内のいじめの中でも、特に休み時間が圧倒的に多いことがわかっている。教室から出てはいけない、他のクラスや他の学年の階には行ってはいけない等のルールがあるため、児童生徒は教室にいる時間が長く、特定のメンバーと半日以上同じ空間に居続けなければならないのが現状である。その中でストレスを発散する必要が出てきた結果、仲間をいじる、からかうという形でのストレス発散行為が出やすい空間になっているのではないか。

##### ② アンケート調査の結果より

アンケートにおいて「いじめ」という言葉を使ってしまうと受けている行為がいじめかどうかという判断を個人の主観に任せてしまうことになる。そのためにより客観的に判断するために、国立教育政策研究所で年 2 回のアンケート調査を実施した。小学 4 年生～中学 3 年生のどこかでいじめに該当する行為を一度でも受けた児童生徒の割合を数えると、9 割にのぼるという結果になった。しかし、1 2 回以上受けた児童生徒に限定するとその数は随分減ることになる。少ないとはいえ、ずっといじめられている児童生徒というの、一定の数は存在している。つまり、いじめはある程度は誰もが経験するが、特にいじめられている児童生徒がいるということがわかる。ただし、誰もがいじめを経験するという一方で、加害行為も 9 割近い児童がどこかで誰かに行っているというデータも出ている。

##### ③ いじめはエスカレートする

滋賀県大津市の中学 2 年生のいじめの調査からみても、いじめは少しずつ育っていく。2018 年に総務省が公表した、いじめ防止対策の推進に関する調査結果報告書をみると、重大実態のケースを分析した結果、78%の事案で「冷やかし、からかい等」がエスカレートして重大実態に至っていたことがわかる。自死案件についても、発生前に被害者自身が「死にたい」などとほめかしていたケースが半数を超えている。

##### ④ 対応策

上記のことからも、対策においては早期発見・早期対応が重要になる。いじめのエスカ

レート of the process before, children students that consultation easy environment creation, do not leave environment creation and doing it is necessary. The rate of the discovery・intervention rate to be raised in such a system creation is necessary.

#### 4 研究内容 2

<p>研究主題 ワークショップで学ぶ子どもとの付き合い方 講師 神戸親和女子大学 金山 健一</p>
--

内閣府や文部科学省の統計調査によると、日本の子どもたちの現状は、34歳までの引きこもりが54万人、不登校（小中高）19.3万人、高校退学者4.7万人、いじめ（小中高）41.4万件、若年無業者71万人、引きこもり（34歳まで）54万人という現実である。また、15歳から39歳までの死因の1位が自殺となっている。小中学生に行った「死んだ人が生き返ると思うか」という質問にも15.4%が生き返ると回答している。このようなデータを受けて、学校でできる児童生徒への対応、その際に大切なことは何だろうかを議論する。

学校でできること・子どもへの対応

包括的支援モデル

水準	対象	方略
一次支援	全児童対象	予防的な教育相談 (ピアサポート・グループエンカウンター)
二次支援	一部の児童生徒 (いじめ・不登校)	チームでの教育相談 (コンサルテーション・チーム学校)
三次支援	特定の児童生徒 (非行・AEHD)	個別の教育相談 (カウンセリング・心理療法)

##### ① 解決志向モデル（ブリーフセラピー）

原因⇒問題⇒解決の過程で、原因は複合的・特定不能・解消不能の場合があるので、扱わず、解決（ゴール）の設定を行いそこに向かっていく。具体的で小さな近未来のゴールを設定し解決へのイメージをもって支援にあたる。

##### ② スケーリング・クエスチョン

「最悪の時を1点、最高の時を10点とすれば、今のあなたはどれくらいか」という質問を提示し、今の点より1点だけあげるに何をすればよいかを考える。

##### ③ コンサルテーション

異なる専門性や役割をもつ者が協働で支援にあたる。

担任、学年主任、校長、教頭、生徒指導主事、養護教諭、SC、教科担任、部活動顧問

#### 5 感想

いじめが起こる学校現場でのパターンや子どもたちのおかれている現状を詳しく知ることができ、対応方法を学ぶことができた。学校現場で子どもたちをみても、他者に相談や援助を求める力が低い子が多くなってきているように感じる。子どもが辛い体験を話すのはとても勇気が必要であるかと思う。信頼できる養護教諭の存在が、学校の安全基地となり、いつでもつながっていると子どもが感じられる声かけをすることが大切なのだを改めて実感した。

また、社会的な絆づくり（ソーシャルボンド）の手助けをしていくことも必要であると感じた。子どもと子どもをつなげること、意図的に誰かと誰かをつなぐこと、必要な時に必要な人とつながることの援助をしていくことも養護教諭の重要な任務であると感じた。「10年間引きこもっていても解決しない」というお話が印象に残った。また、納得と説得は違うため、説得させても子どもは決して変わらない、納得させる技をもつことも必要なスキルであると感じた。子ども達の発達の課題は成長の課題である。子ども達ひとりひとりの課題の早期発見、早期対応ができるよう、これからも養護教諭として人間性を高める研修を怠ることなく、支援していこうと思う。